紙面法話　報恩の足元

信仰とは読んで字の如く信を仰ぐことです。仰ぐと言えば卒業式の時の仰げば尊しわが師の恩、……の歌のようによくよく振り返ってみると、先生のご苦労、御恩が思い出され,先生への御礼の歌でしょうね。信仰生活とは、信を拠り所としてゆく生活。またその信のはたらきによってわが身の有り様が知れされる、普段気づかないことに気づかされる生活でありましょう。でも仰いで上の方ばかり見てると、けつまづいて転ぶこともあるので気を付けましょう。足元もたまには目を向けて下さい。

私の祖母のお話ですが、常日頃、ご法話の中で「足元の報恩わすれなさんな」「私の足で歩んでおるように思うているが、実は運ばれとるんやで、下駄や草履に痛いの引き受けさせて」「手を合わせ称えておるのは私だが手を合わさせ称えさせておるのは目にはみえないけれど、みな如来様のはたらき、お念仏こそが報恩感謝」「現れては消えてゆく。あてにならぬ祈りや感謝にすがりついとっては、何時すっころぶや知れんよ」「足元にご用心」と事あるごとに口癖のように言っていました。

そんなある日のこと、こんなことがありました。40年も前のことです。ご近所の方でご主人に先立たれてからお寺のご法座に時々いらっしゃるようになった鈴木さんという方がおりました。お正月もあけてのころ、鈴木さんのお宅へ月忌のお勤めに寄らせていただいたときのことです。玄関で新年のご挨拶申し、仏間に入りましたところ、後から何やら風呂敷に包まれたものをもってやってきました。風呂敷を開くと下駄が入ってまして、実は元旦に割れたそうで、縁起でもないのでお祓いの相談かと、一人勝手に想像してしまいました。ところがよくよくお話を伺うと、私の早とちりで、まったくそうではなく、この下駄が割れたことで、とっても有難いご縁に会わせていただいたというお話でした。鈴木さんは７５歳で娘さんが二人おりまして、二人とも近くに嫁いでお孫さんもいらっしゃいます。いつもお正月には娘夫婦と孫たちもそろってやってくるので、お節料理も、お年玉も用意して、掃除も済ませて、準備万端、清々しい気持ちでいよいよ元旦当日。初日の出を拝もうと玄関に、下駄を履いて歩きだしたところ「パリッ」と下駄の割れる音。「アレー」「縁起でもない」よりによってこんな時に。脳裏に浮かんだのは、両娘夫婦に厄年はないか、孫に災いが？心配になってきたそうであります。初日の出どころでは無く、部屋に戻ってそれぞれ年齢を調べて教えてあげなきゃ、と、そのとき目の前の壁に掛けてあった「報恩に休みなけれど年の朝」と書かれたお寺からもらった法話カレンダーが目に入ってきました。ふとお庫裏さんから常々聞いていた言葉「足元の報恩忘れるな」が同時に心の中に響いてきた。何度も聞いてきたこの言葉。あっと思い、玄関に戻り、下駄を取り上げてじーっと見たら右の下駄が割れてました。実は先日、娘から「お母さん、もうええ加減に下駄変えてよ、こんなにすり減って、ヒビはいっとるで」と言って新しいの買ってくれてたんですが、なかなか使い慣れた下駄捨てられず、とことん履く性分なので、新しいの履かずに今日まで至り、そしてたまたま割れたのが元旦になったのでした。思えば下駄は物喋りません。どんな雨の日も、砂利道も、すり減っても、文句一つ言わんと私の足の痛いの引き受けて下さっております。こんだけすり減って、本来はお礼の一言でも言わないかんのに、感謝しなきゃいかんのに。それなのに私って薄情やなー、お礼の一言どころか今までお世話になってきた下駄さんに向かって「縁起でもない」なんて。私が下駄やったら怒るわ「この薄情もの、今までどれだけ足の痛いの引き受けてきたかわからんのか」と言いたくなるわ。縁起でもないのは、私の方でした。集まった娘夫婦や孫たちに早速この出来事をお話して皆で声高々に正信偈のお勤めをしました。「お念仏は無碍の一道、何も恐れることはないんだよ」何度聞いてきたことか、何度聞いても右の耳から左の耳へ、なんとおそまつな私ですね。下駄さんにそのことを気づかせていただきました。今度お寺にお参りさせていただいたときに是非お庫裏さんにこのことを聞いていただいき、お礼が言いたいとのことでした。鈴木さんからお話をお聞かせただいたき、私の方こそ鈴木さんを通して祖母のご教化、親鸞聖人の尊いご教化に会わせていただいたこと感謝しつつ、月忌のお勤めをさせていただいたことでした。

一日一日の積み重ねが一週間。一週間一週間の積み重ねが一か月。一か月一か月の積み重ねが一年。元旦早々下駄が割れてビクビクしながら過ごすのも一年ですが、元旦に下駄が割れても、拝んでいける、お念仏一つで180度大転換させていただける「恐れなくていいのは世間の迷信。恐れなきゃならんのは無明」是非ともお念仏の日暮らしお過ごし下さい。

下間　哲照　浄真寺（東員町城山）

第10回員弁組門信徒の集い開催のご案内

ドキュメンタリー映画「沖縄戦」上映

3年以上にわたるコロナ禍のなか、私たちの身の回りでも、いろいろな食品や生活用品などの値上げラッシュが続いています。

これは昨年2月にロシアがウクライナに侵攻したのがきっかけとなり、世界各国を巻き込んで、経済など多方面にわたる影響が続いていることによるものでしょう。そのような情勢の中、4年に一度、行われている門信徒の集いを、6月4日(日)午後に開催します。

場所はいなべ市大安町大井田の大安公民館大ホールで、ご本山製作のドキュメンタリー映画「沖縄戦～知られざる悲しみの記憶～」を上映します。

ご本山ではこの映画製作の以前に、戦後７０年の際に本願寺総長があらためて談話を発表しました。また、３年前には全国の寺院宛に「宗門寺院と戦争・平和問題」調査アンケートを実施しました。これらは本願寺が戦争に協力した反省に基づく動きと受け止めます。

展示コーナーへの物品ご協力のお願い

今回の門信徒の集いは、映画上映のほかに、同日、同じ公民館内の一室で戦争にまつわる写真、日記などの文献、物品を展示するコーナーを設けます。戦争を知らない世代がほとんどになってきた今、目で見る形をとり、静かに思いを巡らせるの研修の場ととしたいと思います。戦争にまつわるものを数多く見ることにより、戦争・平和をあらためて考える機会にしたいと思います。

そこでご寺院はもちろん、広く門信徒の皆さまにも、展示できるものをお借りさせていただきたいと思います。展示品は、日露戦争までさかのぼるものでもお受けしようと考えております。まずは、お手次の住職さん等にご一報いただき、ご協力をいただきたく存じます。

どうぞよろしくお願いいたします。

組長　木村　英昭　明法寺（東員町大木）